
同窓会

Hika

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同窓会

【Nコード】

N4912A

【作者名】

Hika

【あらすじ】

高校時代の時の旧友との久しぶりの再会を楽しむための”同窓会”。ある日、ある小さな街の、ある料亭で、二組の”同窓会”が行われた。それぞれの者達の、それぞれの昔からの想い。その全ての結末は今日、この”同窓会”で決まる……。*全13話*

1・清水 悠

”次はくまつさかくまつさか駅く”

やる気の無さそうな駅員の声が
音質の悪いスピーカーに乗って耳に届く。

今日は、去年卒業したばかりの
高校三年時の同窓会。

高校三年生の時の思い出なんて
大学受験を必死に頑張ってたことくらいしか無いのだけど。

夏休みだけ、
一ヶ月だけ、
クラスメイトだった吉積菜穂「ヨシズミナオ」と付き合ってたけど、
でも勉強優先にしてたし、
やっぱり高三の思い出に受験勉強、だ。

同窓会には興味はある。

推薦合格した奴らは、年が明けるとほとんど学校来なくなってたし
卒業式の日も、一般入試組みは正直余裕が無かったから
ほんと丸一年まともに会って話してない気がする。

他の奴らとももうほとんどが
半年以上もう会っていない。

だからこう見えても俺は

今日の同窓会はちょっと楽しみだつたりする。

あと三駅で待ち合わせ場所への最寄り駅に到着する。

なんだかちよつと緊張。

別に誰も見ていないのに、その緊張を隠したくて俺は手元にある雑誌に見入った。

この雑誌 Street Walker は、先ほど買ったばかりの、昨日発売のメンズ中心ファッション誌。(レディースも扱っているけど比率的には3対1くらいでメンズ) ストリート系を扱う、俺の大好きな雑誌だ。

パラパラとあても無く捲つて行く。すると『街×人』コーナーに辿り着いた。

この『街×人』コーナーは、街中の素人の写真が載っているコーナー。

この雑誌のコンセプトに似合う格好をしていると、声を掛けられ、写真を撮られ易いのだ。

ちなみに俺も一度だけ載ったことがある。

もうかなり前の話だけど。

撮影現場が俺の行動範囲に近いから、俺はよくこのコーナーをチェックする。

知り合いが載っているかもしれないから。

それでもやはり、載っていることは本当にまれで、
二ヶ月に一度発行のこの雑誌を

毎二ヶ月ごとに買っているにもかかわらず、

一度しか、しかも先輩しか載っているのを見たことが無い。

今月号も誰もか、と諦めかけたたん

それは目に入った。

一番最後の写真の人物。

それは、元彼女の、

千波沙幸「チバサユキ」だった。

1・清水 悠（後書き）

この話は半オムニバス形式です。
各話ごとに語り手が変わります。

語り手は各話のサブタイトルで記載しています。

最後までどうぞお楽しみ下さい。

2・千波 沙幸

もうすぐだ。

もうすぐで、

目的地に辿り着く。

初めての”同窓会”。

同窓会って憶れてたんだよね。

昔から。

.....

城島「キジマ」高校、03年度四組卒業生同窓会

日：2005年12月28日

時：午後6時、梅鶯亭「バイオウテイ」前集合

内容：同窓会：高校時代の仲間に再会し、楽しいひと時を共有しよう

幹事：森下卓郎・紺野梢

連絡先：森下 0901-xxxx-xxxx 紺野 080-0000-0000

さゆっち元気？こずえだよっ！覚えてる？？

来てくれるのを楽しみに待ってまゝす！（^o^★

.....

往復はがきの片方を手に、集合場所の料亭の前に向かう。

みんなそろって会うのは、もう約二年ぶりだ。

けど実は私は、

みんなと一緒に城島高校を卒業していない。

私は高校三年生の夏に、

本格的に音楽を学ぶためにオーストリアの寄宿学校に編入した。

留学したのだ。

それでも元クラスメイトのみんなはそんな私もクラスメイトの一員としてみててくれていて、

だからこの度この同窓会にも呼んでくれたのだ。

城島高校で得たものの中で、一番かけがえの無くて大切なものが友達だ。

そんなみんなにまた会えるのだと思うと、
もう落ち着かなくてしょうがない。

待ち合わせの場所へ待ち合わせ時間10分前に着くと、
意外にももう既に沢山の人が集まっていた。

数人の女子が私の姿に気付くと、彼女達は口をそろえて私を呼んだ。

「さゆっちー!!!」

その声に気付き、男子達もこちらを振り向く。
そして皆かわりがわりに声を掛けてくる。

「千波じゃん!こっち戻ってきたん?」

「久しぶりだねえ！沙幸！マジ！元気だったあ？」

「英語ももうバリバリだったりするの？」

「お前馬鹿だな〜！オーストリアはフランス語だって！」

「いやお前も馬鹿だし。ドイツ語だし」

男子はいつになっても馬鹿ばかり。

それにしても多すぎだと思ったら、

よく見たら三分の一くらいは全然知らない人だったので、
料亭の前に掛かっている看板に目を向けた。

どうやら今日は、

私達の同窓会の他にもう一団体同窓会が開かれるらしかった。

その高校名を見た時、
思わずドキリとした。

＊＊今日の貸切＊＊

松の間：城島高校、03年度四組卒業生同窓会

竹の間：

梅の間：宮北高校、04年度七組卒業生同窓会

宮北「ミヤギタ」高校・・・って、

元彼氏の・・・

清水悠「シミズユウ」の通ってた高校・・・

しかも・・・

、04年度卒業って・・・

悠と同じ学年じゃん・・・。

でもまさか

こんなところで

悠に会うわけない。

そんな偶然ありえないよ。

だって、

もしあったらそれって、

何十分の一の確率だよそれって。

2・千波 沙幸（後書き）

一話目と二話目の語り手の二人が主人公です。
この二人以外の話は、二話完結方式予定です。
最後までどうぞお付き合いくださいな。

3・水野 賢一

「久しぶり！元気だった？」

そんな言葉の飛び交う中、
俺はただ一人落ち着かずにいる。

（まったく悠のやつ、何やってんだよ・・・っ。早く来いっての！）

「賢一？どうしたの？なんか凄い怖い顔」

はっとして声のした方を振り向くと、
そこには高校時代から付き合い始めて、もうすぐ二年になる美月がいた。

「あ・・・ごめん」

「もう。せっかく同窓会に来てるんだから、楽しもうよ。何をそんなに考え込んでるの？」

何故？

何故ってそれは・・・

とそこで、

やっと俺のお目当て、清水 悠がやってきた。

会場がわぁっと盛り上がる。

そりゃそうだ。

彼はクラス一頭が良い人気者。

ナントカやらってめっちゃレベルの高い大学に入ったらしい。

彼は取り巻きを一通り相手にして上手に撒くと、俺の方に歩いてきた。

笑顔で。

「おう賢一。久しぶりだな。元気してるか？」

「元気してるか？じゃねえよ！お前知ってんのか？！」

「何を」

「沙幸さん来てるんだぞ？！」

そこでさっきまで黙って隣にいた美月が、血相を変えて俺を攻め始めた。

「誰よ”沙幸さん”って！！初めて聞く名前なんだけど！どういう関係！？」

「うるせえなあいちいち。お前覚えてねえの？悠の元カノ！あの留学行っただっていう！」

「・・・????・・・っああ！」あの”！”あの”沙幸さんね？びっくりした。

ごめん。だって始めてだったんだもん賢一から私の友達以外の女の子の名前出たの」

そういつてしゅんとする美月は可愛くて・・・

じゃなくてっ！

顔を悠の方に向きなおす。
意外にも動揺してない様子。

笑顔は消えていたけれど

「そう。来てんだよ」

「そーゆー類の話かよ……。知ってるよ。あいつ毎年年末帰って来てるじゃん正月しに。」

しかもさつき雑誌で見たし」

「えっ雑誌って……。？」

「モデルでもやってるの！？沙幸さん！！」

美月も一緒になって悠に身を乗り出す

「や。ほら。Street Walkerの『街×人』コーナー。街中の素人の写真載ってる……。」

「ああ。お前も載った事あるってアレか。びつくりした。でも沙幸さんならモデルでもやってけそうだな。綺麗だし背高いし」

「……。」

「ってそうじゃなくってさ！沙幸さんこの店に来てるんだって！今！！」

「！！……。なんで」

「あつちも同窓会らしい。同じ日に同じ店で同窓会だなんて……。奇遇というかなんというか……。」

「……。で？」

「え？」

「で、何」

「……。え……。いや……。だって……。」

「別に会いやしねえだろ」

「それは……。そうかもしれないけど……。」

「つか会ってもどうもしないし」

ほんとかよ。

だって、
じゃあなんで、
今でもそんな顔してんだよ。

いきなり悠が立ったのでびっくりして見上げると、
彼は一言「トイレ」とだけ言って歩き出した。

俺が何も言わずにいると、悠はこちらを振り向いた。

そして悲しげに微笑みながら、
「気遣いありがとな。だからお前って好き」
と言って部屋を後にした。

「・・・今の悠君じゃなかったら妬いてたかも」

ぼそりと美月が隣でぼやいた。

うん。

俺も。

あいつが女だったら今ので惚れてたかも。

「悠君変わんないね」。しかも相変わらずかつこいい」

「高校ん時からそればっか。お前俺に妬かせたいわけ？」

「ふふつ。どうでしょ。でもさでもさ。なんで賢一沙幸さんがいる
って言い切れるわけ？」

彼女と同じ学校出身の別のクラスの同窓会かもしれないじゃん」

「だって俺この目で見ちゃったんだもん。沙幸さんを」

「マジで？」

「マジで。まさかとは思ってたけど、沙幸さんの周りの連中が留学生
活はどうだとか話してたんだよ」

「うそ」

「うん。城島高校、03年度卒業、しかも”沙幸”なんて珍しい名前の”留学生”なんて、あの沙幸さんしかないじゃん」

「・・・確かに・・・」

「・・・あいつ・・・大丈夫かな。少なくとも動揺してないわけじゃないかったし・・・」

「悠君はまだ沙幸さんのこと好きなの？」

「俺も実ははつきりとは聞いてないからわからないけど・・・好きなんじゃないかなあ」

「今はもう好きじゃなくても、絶対普通とは違う感情があるかもね」
「ああ。悠にとって沙幸さんの存在は、大きかったろうから」

悠は、

一つ上の学年の沙幸さんと出逢って、
いい顔をするようになった。

そして

彼女と別れて

笑わなくなった。

本気で。

付き合い始めた時から悠は沙幸さんの留学のこと知っていて、
それでも遠距離続ける気だって張り切っていたのに・・・

突然、悠は彼女に別れを告げた。

まだ沙幸さんの出発日まで二ヶ月もあるというのに、だ。
本当にいきなり。

今までなんでも俺にだけは全てを話してくれていたのに、

今でも話してくれるのに、

沙幸さんに関わることは今でも教えてくれないままだ。

口を硬く閉ざしたまま。

・・・心を

閉ざしたまま。

その後悠は長い間彼女を作らなかった。

一度同じクラスだった吉積と付き合ったけどすぐに別れてしまった。吉積と付き合い始めた時は悠ももう大丈夫かとも思ってたけれど、どうやらやっぱりだめだったみたいだ。

別れた理由を聞くと悠はただ、

”受験勉強と両立出来そうになかったから”
とだけ言った。

俺は直感的に、

未だに沙幸さんのことが好きだから、と思ったのだけだ。

真実は本人にしかわからないものだから言ってくれるまではそっとしておこう、

と思った矢先に、

同じ会場で同窓会だなんて・・・。

沙幸さんは・・・今悠に会ったら・・・
どう思うのだろう・・・。

どう、反応するのだろうか。

楽しみだけが募るはずだったこの同窓会、
なんだか一混乱ありそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4912a/>

同窓会

2010年10月25日20時46分発行